



市民芸術会館 小ホール



びかびか芝居塾ワークショップから立ち上がった劇団「こったに」



全国から沢山の劇団が参加しそれぞれの演劇で観客をたのしませる第20回出演ビジター劇団「Hula-Hooper」(鳥取)



9月に行われる「まつもと演劇祭」について各代表をまとめる永高英雄さん



2年前に行われた第20回演劇祭の風景

巻頭特集

「演劇のまち。まつもと」

楽しさ多彩に



まつもと演劇祭 県外からも有名劇団が参加

年に1回の「まつもと演劇祭」が活動の柱だ。第22回を数えるこのイベント。東京を除く全国各地から集まる「ビジター」5団体と、地元「ホーム」5団体が3日間にわたって街なかの各地で舞台を踏む。まつもと市民芸術館や映画館を改修したピカデリーホールなどの本格的な会場はもちろん、明治時代から続く米蔵なども舞台へと様変わり。街歩きを楽しみながら演劇の世界にとっぷり浸かることができる。

この演劇祭は、2年前の第20回を節目に新たなステップへと進んだ。これまでは地元の劇団が出演するやり方だったのを、全国から幅広く募集するよう変更。連合会の永高英雄会長は「身内だけでやっている感じが抜けきれなかった」と振り返る。

今年も応募が殺到し、15団体から5団体に絞った。出演予定の中には、趣向(神奈川)やオイスターズ(愛知)など、「演劇界の芥川賞」とも呼ばれる岸田國士戯曲賞の本年度最終候補作品にノミネートされた劇作家の団体も名を連ねている。

ただコンセプトは「東京以外の団体」で、東京からの出演依頼は断らせてもらっているという。その理由を尋ねると、永高会長の口調は熱を帯びた。

「演劇の文化は東京だけに集中していて、地方劇団の活動はほとんど先細りしてしまっているんです。だからこそ、全国各地の仲間たちと同じ苦労を分かち合いながらも互いにます

松 本には「演劇のまち」としての横顔もある。文化芸術が集まる東京を除けば、人口比率での劇団数は全国でも指折り。30年ほど前に生まれた種火のような活動が松本平に広がり、今や地域の愛好者らでつくる20以上の劇団が活動しているという。今回は演劇祭やワークショップなど多彩なイベントを繰り広げる「まつもと演劇連合会」にスポットを当て、その活動や演劇の魅力などを掘り下げる。

ます盛り上げたいと思っています」劇団数の多い松本が旗振り役となり、日本の演劇界に新たな風を吹かせる。野心あふれる取り組みだ。

「演じる楽しさ」誰にでも芝居塾ですぞ野広げる

連合会にはもう一つ、演劇の灯火を消さないための大切な活動がある。「びかびか芝居塾」。未経験者などを対象とし、全7回の内容で演劇を体験するワークショップだ。劇団員が減っていくのに歯止めをかけようと連合会のメンバーが手弁当で始めたもので、今年で15回目。1回平均で15〜20人が受講しているといい、すでに約3000人の卒業生を出している。このうち30人ほどが地域の劇団に入って続けているが、ほかにもさまざまな立場から演劇と関わるケースも多いという。すそ野は確実に広がっているが、永高会長は「将来的には、街を歩く」とびかびか芝居塾のワークショップに出ました。という人があちこちにいるような状況になることが目標です」と、さらなる広がりへ意欲を燃やす。

今年も小学3年生から70歳まで幅広い年齢層のメンバーが受講中。この芝居塾の特徴は、1カ月弱の短期間で6回と集中的に体験し、最後の1回は実際に舞台上で「上演することだ。というのも、演劇は他人に見られて初めて意味を持つもの。ステージの向こう側とこちら側では圧倒的な違いがある。どれだけ緊張するのかとか、どんな気持ちになるのかとか。この体験はやってみたいと味わえせん」と永高会長。4年前からは参加者のニーズを受け、さらなるステップアップを目指す人を対象に「俳優コース」も設けている。

演劇ファン掘り起こしさらなる盛り上げ狙う

実際に劇団で活動しているメンバーは、どんな思いを秘めているのだろうか。「れんげ

でこはん」の加藤吉代表(39)は大学時代にサークルで演劇を経験し、社会人の現在も活動を続けている。「東京じゃなくても芝居ができる環境があるのは幸せなこと。面白いものをつくって見てもらい、結果的に興味を持ってくれる人が増えればいいと思います」と話してくれた。脚本づくりなどは「執念で絞り出す感じです」と苦笑いするが、それを舞台で演じられる喜びはひとしお。6月にはオリジナルの新作「オセロの醍醐味」を上演する予定だという。

松本で演劇が盛んになったのは、1987年の「市政80周年記念事業」がきっかけ。そこから地域の劇団が増え始め、国内屈指のホール「まつもと市民芸術館」が建てられた。そして街なかの映画館ピカデリーホールも廃業に伴い、演劇の舞台に生まれ変わった。照明などの設備は旧中央公民館の移築に伴って、払い下げとなった機材を連合会のメンバーらが運び込み、手づくりの小劇場に仕立てた。永高会長は4月からピカデリーホールの支配人にも就任。新たな立場としても「演劇のまち・まつもと」を盛り上げる役回りとなった。その意気込みは「いろいろなおことにチャレンジしたいですね。というのも、自分たちが思っているほど市民の皆さんには浸透していないと思うんです。演劇文化へのハードルはまだ高いと思うので、それを低くしていく努力をしていきたいです」

まつもと市民芸術館の芸術監督でもある俳優・演出家の串田和美さんとも盛んに意見を交わし合うという。話題に出るのは、ルーミアア中部の地方都市シビウ。「人口がだいたい松本と同じ街ですが、そこでは平日でもほぼ毎日舞台が上演されていて、地元の人たちで満員になるといふんです。松本も演劇ファンを増やしていけばそういう文化にできる可能性があるし、そのためにも「いいものを見られた」と感じてもらえるようにしたいですね」という。熱い思いがギョッと詰まった演劇の舞台上、皆さんも一歩足を踏み入れてみてはどうだろうか。